ワンデーポート

依存問題で新たな取り組み NPOで協働 就労支援

横浜市瀬谷区にあるギャンブル依存問題を抱える人たちの回復施設「ワンデーポート」が、施設利用者の就労支援を行っている。地域のNPO法人と協働できる仕組みを模索し、利用者のスムーズな社会復帰を目指す。ギャンブル依存の問題に一石を投じる取り組みとして注目される。

横浜市の西の郊外に位置する瀬谷区。周囲に畑が広がるのどかな環境にある「わくわく竹村の丘」は、民家を借り上げて運営されている「子どもの生活塾」だ。ワンデーポートからは自転車で約5分。運営する「NPO法人ワーカーズわくわく」は、瀬谷区で介護保険事業や助け合い事業を行うNPO法人だ。

パチンコにはまり、約1年前からワンデーポートに入寮して回復を目指してきた小林修二さん（38・仮名）は、ワンデーポートに来てしばらくすると施設長の中村努さんの勧めでこの「竹村の丘」でボランティア活動をするようになった。ここは親が生活困窮者の「子ども」を対象にした午後の居場所。横浜市の委託金で運営され、子どもたちは学校が終わるとここに来て、スタッフと一緒に家庭では目の届かない学習や様々な生活体験を積むことができる。

小林さんは以前、北関東で介護の仕事をしていた。しかし、パチンコにはまり借金をした上に家族の中で孤立。妻子を置いて別の女性と逃げたものの、ギャンブルの問題でその女性とも別れた。地元に戻り、家族と離れてひとりで暮したが、ひとりの寂しさからまたパチンコに走ってしまった。見かねた姉が、費用を負担してくれてワンデーポートにつながったという。

ワンデーポートの中村さん（左）とワーカーズわくわくの中野さん

「NPO法人ワーカーズわくわく」の理事長を務める中野しすよさんとワンデーポートの中村さんは、瀬谷区でNPO同士が集まる会合が始まった5年ほど前から交流があった。地域のNPO同士が横のつながりを持てばもっといろんなことができるのではないかと考える中野さんは、ワンデーポートとも積極的にかかわってくれた。

ワンデーポートのプログラムで小林さんが就労の時期になると、ボランティアで働く小林さんの人柄を見込んだ中野さんは、横浜市の「ふるさと創生雇用促進事業」としてワーカーズわくわくがはじめた「買い物サポート事業」のスタッフにハローワークに登録した小林さんを採用。小林さんはいまこの事業の担当者として働いている。

小林さんは二人への感謝をこう表す。

「自分の状況や生きづらさを理解してもらえる環境で社会復帰を目指すほうが、自分としても無理なくできるかなと、中村さんと中野さんに相談しました。諸事情を伏せて就労する仲間も多い中で、自分のすべてをわかって受け入れてもらえているというだけでも、いきなり社会に戻るより精神的にはるかに楽です」

小林さんのほかにもワンデーポート出身者で「ワーカーズわくわく」で働く先輩がいる。ワンデーポートではいま、利用者の就労支援や社会復帰をいかに無理なく進めるかを模索している。

2年ほど前に中村さんが知り合った横浜・寿町の「NPO法人さなぎ達」は、東京山谷、大阪釜ヶ崎と並んで日本三大寄せ場といわれる寿町で「さなぎの食堂」を運営している。この食堂のボランティアとしてワンデーポートの利用者を受け入れてもらったところ、利用者がワンデーポートでミーティングをしいるときよりも生き生きしていることに中村さんは驚いたという。「それまでのミーティングさえしていればいい

ギャンブル依存問題

業界は次のステップを

ワンデーポートの中村さんがミーティング重視からボランティア活動へ目を向けはじめた背景には、ギャンブル依存に陥る人の変化がある。

「以前は、ここに来てある程度ミーティングをやると、仕事をするようにアドバイスをし、または自力でハローワークに行く人もいた。それでよかった。ところが、最近はそういうアクティブな利用者が減った。代わって、自力では就職活動ができない人たちが増えてきた。2010年の消費者金融の総量規制後は、以前のようにサラ金で借金をして破滅するというタイプの人は減っている」

中村さんが利用者をよく観察していると、もともと能力が低い人や対人関係が苦手な人がいることに気付いた。そういう人には精神科医など依存症のクリニックではなく、発達障害のクリニックを受診することを話し合いながら勧める。その結果が、「精神障害者保健福祉手帳」や「療育手帳」を受けられるレベルの人もいるという。手帳があれば障害者雇用の枠で就職し、社会復帰できる道が開ける。かつては集団のミーティングだけでよかったが、利用者の社会復帰をサポートするために、いまは一人ひとりに対応しなければならない。

「既存の知的障害者用の施設は重度の人たちのための施設。でもワンデーポートの利用者はグレーな位置づけ。そんな社会の制度の狭間でうまく生きられない人たちをどうするか。それこそNPOでなくてはできない仕事だと思うようになってきた」

知的レベルが低くても、以前の日本にはそういう人たちが働ける場所があった。しかしいま、そうした職場は東南アジアなどに移っている。居場所がなくなった社会的弱者の中には、パチンコホールしか行き場がないという人もいる。決して「依存症は病気」とひとくくりにできる問題ではない。

障害者自立支援法により国の助成を受けている他の依存症治療施設とは一線を画し、ワンデーポートは現在、利用者の寮費と寄付だけで運営されている。行政から助成を受けると、利用者ではなく行政を向く運営になってしまうと考えるからだ。「寄付がもっと増えれば利用者などが働ける事業もできるし、寮費の負担を減らすこともできる」と中村さんは言う。

パチンコ・パチスロ産業では業界14団体でパチンコ・パチスロ依存問題の相談機関、リカバリーサポート・ネットワーク（RSN）を支援している。RSNを依存問題解決の入口と見れば、依存問題を抱える人の出口を担っているのがワンデーポートのようなNPOといえる。ワンデーポートには有志のホール経営者やホール団体が寄付を続けてくれているというが、まだまだ十分ではないのが現状だ。RSNへの支援の先に、業界はどうしたNPOへの支援も考えていくべきではないだろうか。

（本紙・野崎太祐）

認定NPO法人 ワンデーポート

ギャンブルの問題を抱える人たちの回復施設として2000年に設立。2005年にNPO法人化した。理事長は司法書士の稲村厚氏。現在、中村施設長のほか同施設のOB合わせて4人で運営。設立以来の総利用者は350名を超えた。利用者は寮費・食事代などを含めて月に約16万円を自己負担しなければならない。今年、認定NPOの認可を受けたことで、個人の寄付は寄付控除が受けられるようになった。法人は一般算入金額とは別枠で損金算入ができる。寄付の振込先は下記。

◇郵便振替口座　00280-0-46026　特定非営利活動法人ワンデーポート
◇問い合わせ先／電話045-303-2621
e-mail oneday.yokohama@knd.biglobe.ne.jp

移転

フェイスグループ本社
フェイスグループは自社ビルの竣工に伴い、本社事務所を左記の住所に移転した。
業務開始日は12月5日。
〒812-0016
福岡市博多区博多駅南3-6-16
フェイスビル6F
TEL092・483・0777（代）
FAX092・483・2555

クレオネットワークス本社
株式会社クレオネットワークス（土屋淳一社長）は業務拡張のため、本社を左記の住所に移転した。
業務開始日は12月5日。
〒108-0075
東京都港区港南4-1-8
リバージュ品川
TEL03・5769・3630

人事

フェイスグループ
10月10日開催の株主総会ならびに取締役会において、左記の役員が選任された。
代表取締役社長　福山浩範
代表取締役副社長　福山裕治（昇任）
取締役専務　福山英明（昇任）
取締役常務　井手口清一（昇任）
執行役員営業本部長　三宅秀樹（新任）
執行役員総務部長　紙川章次（新任）
監査役　木村信行